

東南アジア史学会会報 No. 40

昭和59年3月

御 挨 拶

会長 市川健二郎

会長代行の藤原利一郎先生の後をうけ、第10代会長（昭和59—60年）を、今回、私がお受けすることとなりました。元来、学会事務は奉仕活動ですが、進んで委員の仕事を分担して下さった皆様の御好意に対して、心から感謝致しております。

「博物館の仏像展会場で、如来像の前におさい錢が盛られているのをみて、一瞬立ちどまった」という、ある書物の記事をよんで、「なるほど、これが歴史の姿だ」と、気づきました。美術史の時代変化の史料として仏像をみる反面、礼拝する本来の伝統の心を知ることも大切でしょう。異なった考え方をもつ人びとが対立したり、共存したりする世の中が歴史の経糸と緯糸を彩っています。学会もまた、各人各様の考え方が共存する浮世の一場面でしょう。既製品の物さしで計らずに、他人の尺度に耳を傾け、自分なりに多様な考え方を集約すると、どういうことになるかと考えたいと願っています。

よろしく、お力添え下さるようにお願い申し上げます。

会長選挙管理委員会

昭和58年10月に会長改選のための選挙管理委員会が発足し、明石陽至（委員長）、伊東利勝、大木昌、梶山勝、榎木瑞生の5名が会長代行の指名により同委員となった。同委員会は11月27日、国内在住の会員による直接選挙の投票を開票し、その結果、会長候補者選考委員として次の8氏を会長代行が指名した。なお、第7位に同数票が2名並んだため、定員7名に1名を追加して8名とした。

生田滋、石井米雄、市川健二郎、桜井由躬雄、白鳥芳郎、永積昭、藤原利一郎、山本達郎
(50音順)

会長候補者選考委員会

昭和58年12月3日正午より、東京大学教養学部8号館で委員会を開催し、会長候補者として市川健二郎氏を選出した。同氏の第10期会長就任は、12月4日の会員総会で正式に決定された。

第10期第1回委員会

昭和59年1月12日に東京、本郷の学士会館分館で委員会を開催し、前記総会で会長一任とされていた新委員の委嘱について、会長より次のような報告があった（敬称略、任期昭和60年末まで）。

庶務：青柳洋治、栗原悟、長谷川清。会計：鈴木恒之。会計監査：和田久徳。編集：石沢良昭、伊東照司、加治明。編集顧問：白鳥芳郎、山本達郎。涉外：石井米雄、永積昭、山本達郎。関東地区：白鳥芳郎。関東大会：生田滋、川本邦衛、陳荆和、量博満。関東例会：池端雪浦、永積昭。関西地区：藤原利一郎。関西大会：桜井由躬雄、土屋健治、中村孝志、吉川利治。関西例会：桃木至朗。東北地区：藤沢義美。中部地区：明石陽至。中国地区：今永清二。九州地区：山内正博。

なお、事務局は①108 東京都港区港南4-5-7 東京水産大学社会科学研究室東南アジア史学会
(電話 03-471-1251)

第30回研究大会

昭和58年12月3日（土）、4日（日）の両日、東京大学教養学部で開催された。同大学のプログラムおよび発表要旨は次のとおり。

12月3日（土）

〈自由研究発表〉

「タイ系諸王国の市場組織と地域間交易の諸相」

長谷川 清（上智大・院）

「タイ国古典歌曲における声調と旋律との関係」

種瀬陽子（東芸大・院）

「マレーシア、スグリ・スンビランにおける宮廷儀礼」

富沢寿勇（東大・院）

〈特別講演〉

「日本と華南－民族学的観点から」

伊藤清司（慶應大）

12月4日（日）

〈統一テーマ：東南アジア史研究と史料〉

「東南アジアの青銅器とブロンズ・トライアングル」

新田栄治（鹿児島大）

「東南アジア史料としての嶺外代答」

和田正彦（慶應大）

「ラオス・タイの地方碑文研究の現状」

星野龍夫

「黎朝時代に活字印刷が行なわれた可能性について」

山本達郎

「16世紀末のポルトガル海上帝国と東南アジア」

生田滋（東洋文庫）

タイ系諸王国の市場組織と地域間交易の諸相－滇緬〈三宣六慰〉地区を中心に

長谷川 清
(上智大学院)

雲南から大陸東南アジアにかけての広範な地域にはムアン（muong, muang, möng, 勁）と呼ばれる山間盆地を基盤とするタイ系諸族の国家群が数多く分布している。中国歴代王朝より宣撫司や宣慰司などの士司官職を与えられ「三宣六慰」と総称された南甸、千崖、隴川、車里、孟養、木邦、八百大甸、老撾などがそれである。近年これらタイ系の山間盆地型国家に関しては、その政治構造や水利灌漑組織などが問題とされ関心が高まってきているが、今回の報告では19世紀後半から20世紀初頭に記述された欧米人による探険記や旅行記資料、清代地方志文献をもとに、その市場組織や地域間交易の実態を闡明しようと試みた。

該地域におけるタイ系諸国家の市場組織の存在については既に元代の『雲南志略』や明代の『西南夷風土記』、『百夷伝』等に記述がある。それらによれば市の形態は5日に1回開くという定期市形態が一般的であったようであり、この形は近代に至るまで踏襲された。この「5日市交易圏」ともいるべき地域経済圏はいわゆる「雲南＝ビルマルート」という遠隔地交易ルートの存在と切り離すことはできない。すなわち、これらの5日市はそれぞれ山間盆地の中心地的地点に立地し周辺山岳地域を取り込んだ局地的交易圏を構成しつつ、遠隔地交易ルートに緊密に結びついていたのである。今回、考察の対象としたSip Song Panna, Kengtung, Lannathaiなどの市場の場合、該地域からビルマのモールメンへと至る交易ルート（黄金の道とよばれる）と結びついていた。

さて、上述の地域における市場組織の形態的特徴についてはSip Song Panna王国の場合が示唆的である。Sip Song Panna王国は全部で38個のムアン（勁）が12個のパンナー（Panna, 版納）という行政領域に画分され召片領という最高君主の下に総合されていた。それぞれのムアンには戛（Kat

)とよばれる地方市場が存在しており、5日サイクルの定期市リングを形成していた。こうした市場は民国初年の段階で37ヶ所存在していたといわれる。市場は召囂という官僚によって管理され、丢木拉戛とよばれる市の守護神に対する祭祀が定期的に行なわれた。しかし、市場税の実態や王国経済全体のなかに占める経済的比重などについては不明な点が多く、今後に問題を残している。

次に市場に参集する交易者をみると、タイ系諸族やムアン周辺の山地民、ビルマ人、ホー族とよばれる雲南系中国人など多種多様であった。またこのような市場の多種族的構成を反映して、そこで取引される交易物資も多岐にわたっていたが、①遠隔地交易者（シャン族、ホー族、ビルマ人など）の扱う中国製・ヨーロッパ製衣料品、布帛、日用雑貨品、②近郊の平地系農民の出荷する農産物や食料品、自家製手工業品、③山地民の出荷する棉花、茶、アヘン、獸骨、獸皮、各種薬材というように整理できる。このような参集民族集団と対応した交易品の階層的構造はチェンフンやケントン、チェンマイ、ルアンプラバンなどの王都の市場でははっきりとみてとれる。

さて、こうして商品構造のなかで19世紀後半から20世紀初頭の状況を明瞭に示しているのは換金作物であるアヘンや棉花であろう。これらの物資は主にホー族が山地民から集めるものである。ホー族は該地域における地域間交易網を完全に掌握し山地民経済にまで多大の影響を与えていたのである。彼らの交易活動の範囲は大理、昆明、騰越、思茅などの雲南各地からビルマ、タイ、ラオスなどの東南アジア各地にまで及んでおり、タイ系諸王国の市場は彼らの経済活動の拠点であった。ホー族による地域間交易網の掌握は欧米列強の植民地経済体制と密接に結びついていたと考えられるが、いずれにしてもこうした地域経済のあり方は、タイ系諸王国はもとより、山地民諸族の政治＝経済構造をも規定していたのである。

東南アジアの青銅器とブロンズ・トライアングル

新田栄治

東南アジア大陸部ではベトナム、タイの青銅器文化が注目されてきた。両地域の青銅器文化の年代については放射性炭素年代測定法と熱ルミネセンス法とにより実年代が想定されているが、出土遺物による検討が必要である。

タイではノンノクタ、バンチェンの古層より出土した有銎の青銅器があるが、有銎斧は中国では殷代後期以降であり、有銎青銅器の実年代の目安となる。また、青銅器以前の遺跡であるバンカオ等では、ほぼ前1300年ころの年代が与えられており、タイ青銅器文化の初現は前2千年紀後半以降であろう。また、ベトナムにおいても、4期編年された青銅器文化のうち、第2期のドンダウ文化期の遺跡から出土した石製の戈は中国個有の武器である戈の影響をうけて作られたと考えざるをえない。この有孔石戈は殷代後期の有孔の銅戈を祖形とするものであろう。したがって前2千年紀後半にベトナム青銅器文化の初現を求めることができる。また雲南においても同様である。これら三地域の青銅器文化が前2千年紀後半以降であるならば、三地域を結びつける青銅器を資料としてあげることができる。

タイ出土の銅戈はいずれも、長胡であり、着柄用の翼状の突起をもつ特徴を示しているが、この特徴はベトナム北部出土の銅戈と共通する。さらに雲南や四川の巴蜀系文化遺跡から出土し、雲南石寨山の例から前2世紀末ころと推定できる。銅勺はバンチェンから出土しているが、竹木製品を祖形として青銅製とした柄の形態をしており、類似の馬王堆漢墓出土の竹製勺の年代から前2世紀前～中葉とされる。これらの勺には小動物像が装飾として付されており、このような小像を器物の装飾として付すことは三地域に共通してみられる。

タイ東北地方、ベトナム紅河デルタ地帯、雲南の三地域では以上の例のほかにも青銅器の種類、形態、装飾などの点において共通するところがあり、しかも三地域のこれら諸特徴はほぼ同時代であったことがいえる。雲南では銅剣と銅戈の特徴によって楚雄あたりを境界として西の洱海地域と東の滇池地域とに分けることができる。さらに各二地域は四川省の東西両地域とも対応し、滇池地域は四川

)とよばれる地方市場が存在しており、5日サイクルの定期市リングを形成していた。こうした市場は民国初年の段階で37ヶ所存在していたといわれる。市場は召囂という官僚によって管理され、丢木拉戛とよばれる市の守護神に対する祭祀が定期的に行なわれた。しかし、市場税の実態や王国経済全体のなかに占める経済的比重などについては不明な点が多く、今後に問題を残している。

次に市場に参集する交易者をみると、タイ系諸族やムアン周辺の山地民、ビルマ人、ホー族とよばれる雲南系中国人など多種多様であった。またこのような市場の多種族的構成を反映して、そこで取引される交易物資も多岐にわたっていたが、①遠隔地交易者（シャン族、ホー族、ビルマ人など）の扱う中国製・ヨーロッパ製衣料品、布帛、日用雑貨品、②近郊の平地系農民の出荷する農産物や食料品、自家製手工業品、③山地民の出荷する棉花、茶、アヘン、獸骨、獸皮、各種薬材というように整理できる。このような参集民族集団と対応した交易品の階層的構造はチェンフンやケントン、チェンマイ、ルアンプラバンなどの王都の市場でははっきりとみてとれる。

さて、こうして商品構造のなかで19世紀後半から20世紀初頭の状況を明瞭に示しているのは換金作物であるアヘンや棉花であろう。これらの物資は主にホー族が山地民から集めるものである。ホー族は該地域における地域間交易網を完全に掌握し山地民経済にまで多大の影響を与えていたのである。彼らの交易活動の範囲は大理、昆明、騰越、思茅などの雲南各地からビルマ、タイ、ラオスなどの東南アジア各地にまで及んでおり、タイ系諸王国の市場は彼らの経済活動の拠点であった。ホー族による地域間交易網の掌握は欧米列強の植民地経済体制と密接に結びついていたと考えられるが、いずれにしてもこうした地域経済のあり方は、タイ系諸王国はもとより、山地民諸族の政治＝経済構造をも規定していたのである。

東南アジアの青銅器とブロンズ・トライアングル

新田栄治

東南アジア大陸部ではベトナム、タイの青銅器文化が注目されてきた。両地域の青銅器文化の年代については放射性炭素年代測定法と熱ルミネセンス法とにより実年代が想定されているが、出土遺物による検討が必要である。

タイではノンノクタ、バンチェンの古層より出土した有銎の青銅器があるが、有銎斧は中国では殷代後期以降であり、有銎青銅器の実年代の目安となる。また、青銅器以前の遺跡であるバンカオ等では、ほぼ前1300年ころの年代が与えられており、タイ青銅器文化の初現は前2千年紀後半以降であろう。また、ベトナムにおいても、4期編年された青銅器文化のうち、第2期のドンダウ文化期の遺跡から出土した石製の戈は中国個有の武器である戈の影響をうけて作られたと考えざるをえない。この有孔石戈は殷代後期の有孔の銅戈を祖形とするものであろう。したがって前2千年紀後半にベトナム青銅器文化の初現を求めることができる。また雲南においても同様である。これら三地域の青銅器文化が前2千年紀後半以降であるならば、三地域を結びつける青銅器を資料としてあげることができる。

タイ出土の銅戈はいずれも、長胡であり、着柄用の翼状の突起をもつ特徴を示しているが、この特徴はベトナム北部出土の銅戈と共通する。さらに雲南や四川の巴蜀系文化遺跡から出土し、雲南石寨山の例から前2世紀末ころと推定できる。銅勺はバンチェンから出土しているが、竹木製品を祖形として青銅製とした柄の形態をしており、類似の馬王堆漢墓出土の竹製勺の年代から前2世紀前～中葉とされる。これらの勺には小動物像が装飾として付されており、このような小像を器物の装飾として付すことは三地域に共通してみられる。

タイ東北地方、ベトナム紅河デルタ地帯、雲南の三地域では以上の例のほかにも青銅器の種類、形態、装飾などの点において共通するところがあり、しかも三地域のこれら諸特徴はほぼ同時代であったことがいえる。雲南では銅劍と銅戈の特徴によって楚雄あたりを境界として西の洱海地域と東の滇池地域とに分けることができる。さらに各二地域は四川省の東西両地域とも対応し、滇池地域は四川

省東部、いわゆる巴蜀文化系の諸遺跡とのつながりがいえる。

青銅戈、青銅斧、銅鼓等の年代観からすれば、雲南・滇池地域、タイ東北地方、ベトナム紅河デルタ地帯の3つの青銅器文化が繁栄したのは戦国時代から前漢代にいたる時期であり、各々が独自性を持ちつつ相互に関係をもって存在していたのである。

以上、前2千年紀後半を上限として、中国南部、タイ、ベトナムには青銅器鋳造の中心地域があり、相互に関係をもちつつ、戦国から漢代にその繁栄の盛期を迎えたのである。

ラオス・タイ地方碑文研究の現状

星野龍夫

メコン中流域（ラオス平地部及びタイ東北部の約三分の一程度）に於いて14—17世紀の間発展したラーン・サーン王国（統一時代）の金石文に関する報告は前世紀の末パヴィー調査団報告（刊行は今世紀に入って完了）を嚆矢とするが、学術的にはその後遠東学院のルイ・フィノーが同学院年報（BEFEO）に碑文7例の所在・実計数・表記・原文の translittération と訳文を、数例は写真付きで、発表したのが最初であった。この報告に続く詳細な研究はなく、1950年までの60年間空白があった。セデスあるいはパルマンチエのリストないしノートがこの間発表されたが、その名の示す通り刻文の内容には言及していない。フィノーの研究を継続したのは数学教師で後にラオス王国考古局へ移ったピエル・マリ・ガニューで、60年代末から暦法と仏像編年の観点からヴィエン・チャン市内にある約250の金石文例の解説を手がけて、BARL誌等に小論として発表された。（70年代の中ばにこの研究はパリ第七大学へ学位論文として提出された。未刊行。）60年代後半に統一ラーン・サーン時代に関する年代記史料の比較研究を始めた筆者はラオス史学の不成立を強調するシャルル・アルシャンボー論文（BEFEO LIII-2-1967）と同様のジレンマにあったが、ガニューに啓発され、ルアン・プラバーンやタイ東北部のメコン沿い遺跡・古寺の調査を行った。現在は広義のタイ史に关心を有するタイの碑文学者たちと解読研究会を持っている。

ラーン・サーンの時代刻文は量的にタート・パノムの17世紀碑文群1061例が一仏塔内部からの発見として例外的に多数である外は、王都であったヴィエン・チャン（16世紀中葉—17世紀末）地方に約300例、ルアン・プラバーン（15世紀80年代—16世紀中葉）地方に約50例と集中的な存在が現在知られていて、第一次的な解説は終了している。石碑は拓本が取られ、臨写され、金文は写真又は臨写されている。ビルマ・クメール等の仏教、ヒンドゥー教遺史跡に残された刻文伝統を形式的に引継いでいる点、表記面でもタム文字、ファク・カム文字の使用、十干十二支使用の暦法、（ちなみにラーオ・エマン暦では本年は日本同様に甲子の年である）北タイのラーン・ナー碑文とラーン・サーン碑文は類似点が多い。ラーン・サーンではラーン・ナーと交渉の深かった15世紀後半から寺院刻文が現出した。しかしながら、ラーン・ナーと違ってラーン・サーンの碑文には王名が明記され、年代記、特にルアン・プラバーン本の貝葉ラーオ年代記とよく一致し、この年代記中に書かれた事件・王の事績が、他のタイで（シャム語で）書かれたラオス年代記よりも史実に最も近いのではないかというのが筆者の現時点である。

アユタヤなどと比べて一次史料の刻文も多数存在し、この宗教記念碑的な史料の他に王朝史史料の年代記も信憑性があるとなるならば、（この点は中国、ベトナム、ラーン・ナー史料との照合とによっても強化されているが、）ラーン・サーン時代は東南アジア史中で史料的に有利な立場にあると言えるであろう。更に付け加えるならば、ラーン・サーン王国やその属国の内部に関して他の隣国の史料も発展期であった十六世紀を中心に豊富である。（インドシナ半島全体のレベルとして。例えばセエン・スリンタ将軍についてクメール、アユタヤ、ビルマの年代記がラーン・サーンの重要人物として言及している。）

（追記）ラオス考古局には「ラオス碑文集」編纂プロジェクトが70年代からあった。しかし、これが

省東部、いわゆる巴蜀文化系の諸遺跡とのつながりがいえる。

青銅戈、青銅斧、銅鼓等の年代観からすれば、雲南・滇池地域、タイ東北地方、ベトナム紅河デルタ地帯の3つの青銅器文化が繁栄したのは戦国時代から前漢代にいたる時期であり、各々が独自性を持ちつつ相互に関係をもって存在していたのである。

以上、前2千年紀後半を上限として、中国南部、タイ、ベトナムには青銅器鋳造の中心地域があり、相互に関係をもちつつ、戦国から漢代にその繁栄の盛期を迎えたのである。

ラオス・タイ地方碑文研究の現状

星野龍夫

メコン中流域（ラオス平地部及びタイ東北部の約三分の一程度）に於いて14—17世紀の間発展したラーン・サーン王国（統一時代）の金石文に関する報告は前世紀の末パヴィー調査団報告（刊行は今世紀に入って完了）を嚆矢とするが、学術的にはその後遠東学院のルイ・フィノーが同学院年報（BEFEO）に碑文7例の所在・実計数・表記・原文の translittération と訳文を、数例は写真付きで、発表したのが最初であった。この報告に続く詳細な研究はなく、1950年までの60年間空白があった。セデスあるいはパルマンチエのリストないしノートがこの間発表されたが、その名の示す通り刻文の内容には言及していない。フィノーの研究を継続したのは数学教師で後にラオス王国考古局へ移ったピエル・マリ・ガニューで、60年代末から暦法と仏像編年の観点からヴィエン・チャン市内にある約250の金石文例の解説を手がけて、BARL誌等に小論として発表された。（70年代の中ばにこの研究はパリ第七大学へ学位論文として提出された。未刊行。）60年代後半に統一ラーン・サーン時代に関する年代記史料の比較研究を始めた筆者はラオス史学の不成立を強調するシャルル・アルシャンボー論文（BEFEO LIII-2-1967）と同様のジレンマにあったが、ガニューに啓発され、ルアン・プラバーンやタイ東北部のメコン沿い遺跡・古寺の調査を行った。現在は広義のタイ史に关心を有するタイの碑文学者たちと解読研究会を持っている。

ラーン・サーンの時代刻文は量的にタート・パノムの17世紀碑文群1061例が一仏塔内部からの発見として例外的に多数である外は、王都であったヴィエン・チャン（16世紀中葉—17世紀末）地方に約300例、ルアン・プラバーン（15世紀80年代—16世紀中葉）地方に約50例と集中的な存在が現在知られていて、第一次的な解説は終了している。石碑は拓本が取られ、臨写され、金文は写真又は臨写されている。ビルマ・クメール等の仏教、ヒンドゥー教遺史跡に残された刻文伝統を形式的に引継いでいる点、表記面でもタム文字、ファク・カム文字の使用、十干十二支使用の暦法、（ちなみにラーオ・エマン暦では本年は日本同様に甲子の年である）北タイのラーン・ナー碑文とラーン・サーン碑文は類似点が多い。ラーン・サーンではラーン・ナーと交渉の深かった15世紀後半から寺院刻文が現出した。しかしながら、ラーン・ナーと違ってラーン・サーンの碑文には王名が明記され、年代記、特にルアン・プラバーン本の貝葉ラーオ年代記とよく一致し、この年代記中に書かれた事件・王の事績が、他のタイで（シャム語で）書かれたラオス年代記よりも史実に最も近いのではないかというのが筆者の現時点である。

アユタヤなどと比べて一次史料の刻文も多数存在し、この宗教記念碑的な史料の他に王朝史史料の年代記も信憑性があるとなるならば、（この点は中国、ベトナム、ラーン・ナー史料との照合とによっても強化されているが、）ラーン・サーン時代は東南アジア史中で史料的に有利な立場にあると言えるであろう。更に付け加えるならば、ラーン・サーン王国やその属国の内部に関して他の隣国の史料も発展期であった十六世紀を中心に豊富である。（インドシナ半島全体のレベルとして。例えばセエン・スリンタ将軍についてクメール、アユタヤ、ビルマの年代記がラーン・サーンの重要人物として言及している。）

（追記）ラオス考古局には「ラオス碑文集」編纂プロジェクトが70年代からあった。しかし、これが

完成したとはまだ聞いていない。

16世紀末のポルトガル海上帝国と東南アジア

生田 滋

本発表は1982年12月の豊橋大会において発表した「ポルトガル=スペイン帝国におけるモルッカ諸島の占める位置」の補足である。

私の関心は16~17世紀のスペイン、ポルトガル帝国において東南アジア地域、とくにモルッカ諸島がどのような位置を占めていたかということである。これを解明する手がかりとしてはポルトガル領インディアに関して書かれたいくつかの租税要覧、もしくは歳入歳出一覧がある。その最初のものは1545年ごろに書かれ、1635年ごろまで何種類がある。このほかごく簡単なものではあるが、16世紀の末にヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテンによって書かれたスペイン=ポルトガル帝国全体に関する記述がある。

ポルトガルは1529年のサラゴサ條約によってモルッカ諸島を完全に支配下においたが、その際王家がスペインに対して支払った額はかなりの額であった。しかし1550年代の状況を検討してみると、ポルトガル領インディア全体におけるモルッカ諸島の位置は決して重要とはいえない。この時期ポルトガル領インディアでもっとも重要な地域はホルムスからバセインに至る地域であって、つまりアラビア半島とインドのグラジャート地方との間の貿易がきわめて重要であったことがわかる。これに比較するとモルッカ諸島、およびマラッカの占める位置は低いといわなくてはならない。しかし各要塞の長官の収入、役得として与えられる各地への航海の権利とそれからの収入を考えてみると、マラッカ、モルッカ諸島などの長官職はかなり有利なものであって、ポルトガルの植民地経営の焦点はむしろインド方面、とくにグラジャート地方の貿易への参入にあり、東南アジアは二次的な意味しか持っていないことがわかる。また東南アジア地域内でもマラッカのほうがモルッカ諸島よりも重要になってくる。これはポルトガル船が中国、日本貿易に参入し、またその際の重要な商品が新大陸の銀、インドの綿織物、中国の絹織物となつたことと関係があろう。モルッカ諸島産の香料は国際貿易の上で限定された役割を占めるにすぎなくなつたのである。

17世紀に入るとオランダ、イギリスが東南アジアに進出するが、このことから両国とスペイン=ポルトガル帝国の力関係を知ることができる。要するに両国の実力はスペイン=ポルトガル帝国のそれに直接対抗できるほど強力なものではなかったということがわかるのである。

17世紀に入ってからの大きな変化はゴアとその周辺からあがる租税収入が重要になり、グラジャート地方からの歳入が減少していることである。これはポルトガルが次第にイスラム商人に圧迫されつつあった状況を反映している。また東南アジアではこれまで巨額の歳入をあげていたマラッカ、モルッカ諸島の歳入が減少し、逆に支出が増大したことである。これはオランダ東インド会社に対抗するためのほか、マラッカでは日本、中国、インド東海岸による布教活動の費用を負担するようになったためである。また長官の収入などを比較すると、他の要塞に比して比較的高いことがわかる。

次に東南アジアをふくめたポルトガル領インディアがポルトガル帝国全体に占める位置を考えてみると、1580年当時その歳入の占める数字は全体の約51%で、「ポルトガル海上帝国」という表現が決して誇張でないことがわかる。

こうした歳入歳出一覧、行政組織一覧の分析を通して得られるポルトガル領インディアのイメージは静的なものであって、それ自体から歴史の動きを明らかにすることはできない。しかし各国、各地方相互間の比較研究に際して常にこうした資料を参照し、バランスを失しないようにしなければならない。

春季研究大会について

春季大会準備委員長

中村孝志

昭和59年春季研究大会は来る6月9日(土)、10日(日)の両日、大阪外国语大学で開催することになりました。プログラムの詳細は追ってお知らせ致しますが、両日を御予定に入れて頂ければ幸いです。

なお、この研究大会での自由研究発表者を募りたいと存じます。発表希望者は題目を添えて4月末日までに(必着)、下記へお申しこみ下さい。

記

〒562 箕面市大字栗生間2734 大阪外国语大学吉川利治研究室

東南アジア—歴史と文化—

No. 13, 1984. 6

目 次

〔論文〕

陳嘉庚—ある華僑の心の故郷— 市川健二郎

Sip Song Panna の民族詩人贊哈について—雲南地方における文化複合の一形態として— 馬場 雄司

〔研究ノート〕

国朝刑律の版本と写本 山本 達郎

学術管見 統訪中彙報—畲族探訪と湖南を中心とした楚文化の探索— 白鳥 芳郎

〔特別寄稿〕

中国における少数民族の研究 胡 起望・索 文清

〔書評・紹介〕

Marcel Bonneeff, et al, Pantjasila, 1980. 永積 昭

Kuntowijoyo, Social Change in a Society: Madura, 1850~1940. 田中 則雄

田中宏編『日本軍政とアジアの民族運動』 岩武 照彦

雲南省編輯委員会編『傣族社会歴史調査』(西双版納之一, 三, 四) 長谷川 清

〔モンスーン〕

カンボジアの仏教研究所の再発足と『クメール語大辞典』の複刻について 石沢 良昭

シュリーヴィジャヤ研究集会に参加して 伊東 照司

第9回 I. A. H. A. 大会報告 永積 昭

フィリピンにおける東南アジア研究 レスリ・E・ハウゼン

フィリピンのイスラム社会に関する最近の研究について 三浦 太郎

タイ研究覚え書き 森部 一

タイ国音楽研究の動向 種瀬 陽子

ビルマ研究の動向—とくに宗教を中心にして— 金 林 名

生きている修羅を使う文化—実験考古学との接点を求めて— 倉田 勇

スマトラ島北部東海岸踏査行—覚え書き— 青柳 洋治

巴蜀及び嶺南地方の青銅器文化をめぐる若干の問題 西江 清高

中国民俗学会の成立について 君島 久子

三吉朋十氏の計 小川 博

東南アジア関係文献目録(1983年1月~12月) 伊東 加治 照司 明

東南アジア史学会会則 東南アジア史学会入会の方法

『東南アジア—歴史と文化—』執筆要領



昭和59年3月 発行

発 行 者 東南アジア史学会（市川健二郎）

住 所 〒108 東京都港区港南4—5—7

東京水産大学社会科学研究室

電 話 03—471—1251 内線341

郵便振替 東京9—132640

〒167 東京都杉並区善福寺2—6—1

東京女子大学鈴木恒之研究室内

東南アジア史学会
